



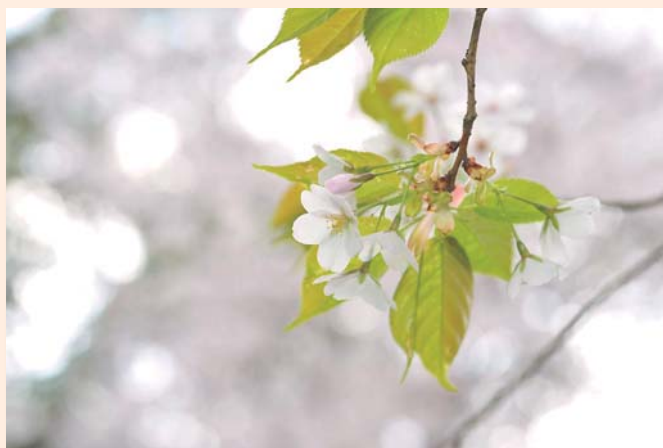
GEKKAN ORIMOTO

月刊 織本

5

2011年5月1日 Vol.201

発行 医療法人財団 織本病院
印刷 〒204-0002
東京都清瀬市旭が丘 1-261
TEL 042-491-2121
URL <http://www.orimoto.or.jp/>
発行人 高木 由利



第6回 多摩CKD 超低たんぱく食治療研究会

理事長・院長 高木 由利



あの大地震から1ヶ月以上経過しても東京は時折ゆらゆら揺れています。しかし季節は移り変わり、いつもの様に私の通勤路には美しいハナミズキの花が満開です。

* * *

地震や計画停電と不安定な中で、私は思い切って

“第6回多摩CKD超低たんぱく食治療研究会”の開催に踏み切りました。世話人の先生方や共催してくれる協和発酵キリン株式会社のご理解とご協力があったからです。こうい

う時だからこそ正しく価値あることを伝えていこうという思いでした。

当日は80名を超える方々にご参加頂き、活発なディスカッションが繰り広げられました。超低たんぱく食治療とは、CKD(慢性腎臓病)の進行抑制を実現する唯一の方法であり、その内容は標準体重《身長(m)×身長(m)×22》1kg当たり、1日0.3~0.5gのたんぱく摂取です。更にそのたんぱくの内60%以上を動物性たんぱく(肉、魚、卵、牛乳)で摂ることと、その方に見合った十分なエネルギーを摂取することなのです。そのエネルギーの求め方は、標準体重1kg当たり30~35kcalです。こんなことをズラズラ書いていると面倒臭くなる方も多いと思います。しかし私達は食事によって生かされているのですから、本来厳密に且つ正確に献立を組み立てるべきなのかもしれません。

この地球上では人間のわがままや高慢により、たくさんの方が生まれています。その代表的な病気が肥満、糖尿病、高血圧、そしてメタボリックシンドロームなのではないでしょうか。テレビでは見るもおぞましい肥満のお笑い芸人が色々なお店でガツガツと食事をむさぼる番組が流行っているようです。私はテレビ

第6回 多摩CKD超低たんぱく食治療研究会

【総合司会】 緑風荘病院 院長 酒井 雅司 先生
【学術情報提供】 『透析導入前の腎性貧血の管理』 協和発酵キリン(株)

研究会総会 (19:30~19:40)
DVD上映 (19:40~20:00)

テーマ 『おいしい! 低たんぱく食』
・おいしい低たんぱく食クッキング
・私にもできる、おいしく食べる
解説: 織本病院理事長・院長 高木 由利 先生

症例検討会 (20:00~20:50)
テーマ 『糖尿病性腎症の食事指導』
座長: 織本病院 内科 薬橋 健夫 先生
コファーマー: 緑風荘病院 栄養士 西村 一弘 先生
ケース1: 小平北口クリニック 栄養士 佐藤 麻衣子 先生
ケース2: 多摩総合医療センター 内科部長 西尾 康英 先生

【閉会の辞】 織本病院 理事長・院長 高木 由利 先生

日時: 平成23年4月21日(木)
19:20~20:50
会場: 緑風荘病院併設グリーンボイス

●参加費として500円を徴収させていただきます。
●当日はお弁当をご用意しております。
●当日は19:00まで計画停電が行われる可能性がありますので、19:00以降にお越し頂きますようお願いいたします。

【共催】 多摩CKD超低たんぱく食治療研究会
協和発酵キリン株式会社

が嫌いなので見ることはありませんが、偶然ついている映像が視野に入ると思わず目を背けてしまいます。誰かがこの病気達と真剣に向き合う必要性を述べ伝えていかなければなりません。食事を遊びや趣味のレベルで片付けるのではなく、体を根底から守る価値あるものとして捉えようではありませんか。

CKDは自分のずさんな食生活が原因でなった方ばかりではありません。遺伝や何らかの感染症、他の病気をきっかけとして発症している方も少なくないのです。私の外来には程度の差こそあれ、様々なCKDの方が200人程通院していらっしゃいます。その方々

と食事について指導をしたり人生を語り合う中で、私の日々の生活は食事に配慮する豊かな人生へと変化してきました。

世話人のひとりである、多摩総合医療センター内科部長の西尾康英先生が発表の最後に“CKDの超低たんぱく食事療法は、患者さんに意識の変革をもたらし、且つ医師との関わりはまさに全人的医療である”と語られました。私も同感です。これから、私を含めこの会の7人の世話人の先生達は食事療法の伝道者としてより多くの方々に述べ伝えていくのだと思います。

患者さまから学ぶこと

医事課 課長 折山 美香



織本病院に就職して14年、多くの患者様と出会うことができました。当院には長年通院されている方も多いため、就職した当時は患者様から院内の事を教えて頂くことも多く、私たち医事課スタッフは、患者様から育てられていると言っても過言ではないように思います。

先日、「患者と医療者の向き合い方」をテーマにした講演会に参加する機会がありました。患者と医療者、また医療者間の良好な人間関係が事故を防ぐ... お互いに尊重し合う関係がチーム医療の基礎であるといった内容でした。その帰りの電車の中で、ふと何年前の会計窓口での出来事を思い出しました。ある患者様が、会計時にその日の診療費が高いと会計担当の若い

スタッフに声を荒げていました。計算間違いがあったのではと確認に行きましたが間違いはなく、その日に受けられた検査の費用が高かったため、そのことを説明しましたが、なかなか納得して頂けませんでした。私はその後も何度か同じ説明を繰り返し、そして不服そうにお帰りになられた患者様の後ろ姿を見送りました。その日の夕方、「先程は窓口で大変失礼なことを言って申し訳ありませんでした。」とその方から電話が入り、私が説明したことをご理解頂いたのだとホッと胸をなでおろしたのを今でもはっきり覚えています。しかし、今振り返ると本当にそれで良かったのかと考えてしまいます。私は確かにきちんと説明しましたが、それは医療従事者として当たり前のように保険点数の説明をし、医療制度の話をし、そして上から目線で「〇〇なんです!」、「こういう決まりなんです!」と自分の立場を利用して、無理矢理納得させてしまったのではないかと... その方は、本当は保険点数のことを聞きたかった訳ではなく、自分が不安に思っていることをただ伝えただけではないのか... と思うのです。私があの時、患者様の目線で心を和らげる言葉を一言、説明の前に添えることができているならば、きっと良い信頼関係が築けたのではないかと反省しました。私たちが日々窓口で聞かせて頂く



患者様からの生の声が、これまでに経験してきた失敗事例を改善点として、また良かった事はより良い方向へと導いて下さっているのだと思います。

私たち医事課は、直接診療には関わっていませんし、病気を治すこともできません。しかし、窓口や待合室で「いつもありがとう。」とか「最近見かけなかったけど元気？」などと声をかけて下さる患者様がいらっしゃる時、その様な方々から私たちは癒され、そして癒されることにより優しい気持ちで人に接することが

できるのだと思います。それが当院の理念のひとつである「患者様と職員、双方が癒される病院にする」ということに繋がっていくのではないのでしょうか。

4月より常勤医として吾妻医師を迎え、さらに8月から女性の常勤医師が1名加わります。織本病院がまた大きく変わろうとしています。私たちもチーム医療の一員として、これからも患者様と共に歩んでいきたいと思っています。

THE Vol. 54
病理診断

『患者様の満足する医療を妨げるもの』

聖マリアンナ医科大学 診断病理学教室教授

高木 正之 先生



今回の東日本大地震は天災だが、原発事故は人災であるという見方がある。原発は我々の生活に恩恵を与えているが、一方で放射能被害というマイナス面を抱いている。原発を安全に維持するためには、そのマイナス面を克服する努力をしていかなければならない。人間の驕り^{おご}が、その危険性を克服する努力を怠ったのではないか。

医療従事者として、私たちは同じような過ちをしないと云えるだろうか。ヘンリー・ナウエンは、ハーバード大学教授を辞し知的障害者の施設に移った。そのときの彼の祈りである。「主よ、私は自己中心的で名声にとらわれています。たびたび思うのですが、私はあなたさえも私自身の利益のために利用しているようです。私は、しばしばあなたについて語り、あなたの御名によって行動していたのですが、それは自分自身の栄光と自分自身の成功のためであったのです。」彼は、自分の理想と自分の心にある神さえも自分の為に利用する欲望の間で葛藤したと告白している。

私が病理医になった頃、難しい病理診断をして担当の教授に「先生、あれはおもしろい症例ですね。」と誇らしげに言ったことがある。彼は「おもしろいとはどういうことだ。患者さんにとっては大変なことだ。」と叱った。その時、私は患者さんを1人の病める人間としてではなく、興味ある1症例としか見ていなかったことに気づいたのである。私自身の心の中にも人から賞賛を受けたいという思いがある。それ自体は悪いものではない。しかし、この名誉欲が頭をもたげてきて本当の医療をすることを邪魔するときがある。そのとき、私は1つの聖書の言葉を思い出す。「喜ぶものといっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」患者さんのための医療をしようとするとき、その言葉を実践することの大切さと難しさを実感した。

私たちは弱さを持った人間である。織本病院の理念である「患者様に満足して頂ける医療を実践する」ことを願いながら妨げるものがある。私にとってそれは驕りである。私はこの弱さを克服するために「喜ぶものといっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」の言葉をいつも思い起こしながら理想の医療を実践したいと願っている。



消化器科

吾妻 司

Tsukasa Azuma

Dr. 紹介

doctor-introduction

Message

4月より織本病院に勤務することになりました。よろしく
お願い致します。

もともとは東京女子医科大学消化器病センター外科に所属
していました。この3年間は諸事情によりメスを握る機会
はありませんでした。そのため、内科、外科の枠にとらわれ
ず消化器科全般の医師として勤務させて頂いております。

患者様のために今の自分に何ができるか、また病院のために何をすべきかをじっくりと考え、少しでも皆様のお役に立てるよう努力してまいりたいと思います。日常の診療においては、常に患者様に満足して頂ける医療を提供できるように、そして織本病院に来て本当に良かったと思って頂けるように心がけていきたいと思ひます。

Profile

- 略歴：昭和 34 年 4 月 山梨県甲府市生まれ
昭和 59 年 3 月 千葉大学医学部 卒業
昭和 59 年 4 月 東京女子医科大学消化器病センター外科 入局
平成 17 年 1 月 立正佼成会付属佼成病院 消化器外科部長
平成 20 年 4 月 千葉みなと病院 院長
平成 23 年 4 月 当院 勤務

- 所属学会： ■ 日本外科学会 専門医
■ 日本消化器外科学会 指導医・専門医・(元) 評議員
■ 消化器がん外科治療認定医
■ 日本肝胆膵外科学会 評議員



院外処方せん発行開始日の変更について

いつも月刊織本をご愛読頂きありがとうございます。先月の月刊織本4月号に掲載した『院外処方せん発行のお知らせ』で、発行開始日を5月10日(火)と記載しましたが、**5月6日(金)**に変更となりました。

第121回 腎疾患ゼミナール

『あなたと私と腎不全 ③』 腎臓内科：高木由利

栄養科からのワンポイントアドバイス

『でんぷんホットケーキミックスを使ってクレープを作ろう!!』

どなたでもご参加頂けます。皆様ぜひお越しください。

管理栄養士：重野 隆幸

日時：2011年5月19日(木)
午後1:00～
会場：オリモホール(当院4F)
参加費：無料

